

教育研究業績書

2022年11月07日

所属：健康生命薬科学科

資格：教授

氏名：稲本 浄文

研究分野	研究内容のキーワード
有機合成化学	遷移金属触媒, 炭素-水素結合官能基化, 複素環化合物
学位	最終学歴
博士(薬学)	東北大学大学院薬学研究科 博士課程前期2年の課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 「有機化合物の骨格と性質 II」	2014年度から2015年度	(2016年度から, 新カリキュラム科目「有機化学III」へ移行.)
2. 「有機合成化学」	2014年度から	健康生命薬科学科3年次学生対象の本講義において, 毎回10分程度の小テストを行うことで, 学生の理解度を適宜確かめながら授業を進めている。また, 一定の範囲が終了したタイミングで確認テストもおこない, 講義内容のさらなる定着をはかっている。化学構造や化学反応への理解を深化させるため, 適宜予習的・復習的内容の課題も課している。講義中における学生への問いかけなどによる積極的な双方向型授業をおこなうことにより, 学生の発表力やコミュニケーション能力, 問題解決能力の向上を目指している。
3. 「応用有機化学 II」	2014年度から	健康生命薬科学科2年次学生対象の本講義において, 毎回10分程度の小テストに加え, 予習的・復習的な内容の課題を与えることで, 講義内容の定着をはかっている。講義中は, 積極的に学生からの発言機会を増やすよう努め, 緊張感とモチベーションを高めるとともに, コミュニケーション能力や発表力, とっさの判断力の育成も目指している。有機化学を単なる基礎科目としてとらえるのではなく, 「実際の医薬品合成における有機合成の役割」や「有機化合物がいかんして医薬品として機能しているか」など, 他分野とリンクする内容の解説もおりませ, 薬学部生としてこの後学ぶ応用的科目の土台作りをおこなっている。
4. 学位論文の指導	2014年度から	研究室配属の学部学生および大学院学生の研究指導では, 研究内容における日々のディスカッションを通し, 研究の遂行はもちろんのこと, 学生の問題解決能力・コミュニケーション能力の育成にも注力している。積極的な学会発表を促すことで発表力・表現能力の向上も目指しており, 最終的に学生自らが能動的に, 研究の計画立案から実施, 得られた成果の評価をおこなえるようになるべく, 指導している。得られた成果を卒業論文・修士論文としてまとめると同時に, いくつかの論文投稿もおこない, 採択されている。
5. 「有機化合物をつくる」および「基礎有機化学実験」(実習科目)	2014年度から	薬学科2年次および健康生命薬科学科2年次学生対象の本実習科目において, 基礎的な実験手技を修得させるのと同時に, 扱う有機化合物の化学構造からそれらの物質としての物理的・化学的性質を系統的に理解できるようになるべく, 重点的な指導をおこなっている。薬学部卒業生に要求される「広範な化合物の知識と, それを利用した応用可能な化合物取り扱いに関する技術」の修得を指向した解説に, 特に注力している。
6. 「創薬化学の概論」	2015年度から2017年度	(2018年度から, 新カリキュラム科目「発展医薬品化学」へ移行.)
7. 「有機化学 III」	2016年度から	薬学科2年次学生対象の本講義において, 毎回10分程度の小テストを行うことで, 当日の講義内容の定着をはかっている。またこれを講義後に回収し, 解答内容を確認することで, 常に「学生の理解度」および「講義内容の適切さ」の把握につとめ, 担当クラスの

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. 「発展医薬品化学」	2018年度から	<p>実状に合わせた最適な内容となるよう、柔軟な講義実施をおこなっている。MUSES を用いた講義内容および小テストのポイント解説による講義の補完も実施している。理解の不足している学生に対する質問対応の場を設けるとともに、余力のある学生に対しての課題提示もおこない、さらなる知識の深化およびモチベーション向上をはかっている。</p> <p>薬学科4年次学生対象の本講義において、有機化学がいかに医薬品のもつ薬理作用を理解するために役立つかを、応用的考察力養成の観点から、分野横断的内容の講義の中で重点的な説明をおこなっている。過去の共用試験および国家試験に出題された問題の提示・解説をおこなうと同時に、特に重要な事項については、問題演習の補助プリントを配布することで、学生自らが手を動かし、内容を十分に理解できるよう努めている。</p>
2 作成した教科書、教材		
1. Cross Coupling and Heck-Type Reactions 2	2013年03月	遷移金属触媒を用いた炭素-水素結合 (C-H) 官能基化による炭素-酸素結合および炭素-硫黄結合形成反応に関する章 (pp. 395-437) を担当。
2. 「薬学基礎演習 II」における演習問題	2014年度から2016年度まで	授業回数分の演習問題を作成した。
3. 「応用有機化学 II」における小テスト	2014年度から	授業回数分の小テストを作成した。
4. 「有機合成化学」における小テスト	2014年度から	授業回数分の小テストを作成した。
5. 「有機化学実験 (有機化合物をつくる, 基礎有機化学実験)」におけるテキスト	2015年度から	学生実習に使用するテキストを作成した。
6. 「有機化学 III」における小テスト	2016年度から	授業回数分の小テストを作成した。
7. 「薬学基礎演習 III」における演習問題	2016年度から	授業回数分の演習問題を作成した。
8. 「薬学基礎演習 I」における演習問題	2016年度	授業回数分の演習問題を作成した。
9. 「発展医薬品化学」における演習問題	2018年度から	講義中の重要な事項について、問題演習の補助プリントを作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 附属高校 3 年生「科学演習実験 III」	2014年度から	附属高校の3年生科目である「科学演習実験 III」を、毎年1回分担当している。「4-フェニル安息香酸の合成」実験により、ノーベル化学賞受賞の対象研究である Suzuki カップリング反応を体験することで、有機化学が薬学分野および製薬業界で果たす役割について解説している。
2. 薬学科5年生・長期薬局病院実務実習	2014年度から	円滑な実習実施のため、指導薬剤師との調整をおこなうとともに、担当学生の指導にあたっている。
3. 担任クラス指導	2016年度から	薬学科6年制コースのクラス担任として、学生指導をおこなっている。
4. 西宮市共通単位講座	2018年07月04日	西宮市共通単位講座「薬学よもやま話 (前後期, 各15回)」の1回分を担当し、「化学の目で見たくすり」というタイトルのもと、受講者に薬学における化学の重要性を説明すると同時に、薬学の果たす社会的役割についても解説した。
5. 幹事懇談会	2019年度から (年2回実施)	教務委員として幹事懇談会に出席し、幹事学生と意見交換をおこなった。
6. 学生幹事長との意見交換	2019年度から	教務委員として薬学部学生幹事長と面談し、幹事懇談会の議題および学生・教員双方がかかえている問題点等についての意見交換をおこなった。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 薬剤師免許	1999年04月	取得
2 特許等		

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日		概要	
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
1. 米国マサチューセッツ工科大学・博士研究員	2006年04月から2007年01月		Prof. Gregory C. Fu 研究室にて「不活性脂肪族ハロゲン化物を用いたニッケル触媒クロスカップリング反応」に関する研究に従事	
4 その他				
1. 入試問題作成委員	2014年4月から2017年3月		拝命 (2016年度は薬学部内取りまとめ役を担当)	
2. 危険物倉庫・廃棄物管理委員	2014年4月から2020年3月		拝命 (2016年度から委員長を担当)	
3. 第74回認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿	2014年9月14日から2014年9月15日		受講	
4. 出前授業	2016年度から		大阪府立今宮高等学校の3年生科目である「医薬学入門」を、他の薬学部教員と共同で担当	
5. 地域別教育懇談会(本部会場)	2016年度から2021年		個人懇談の対応	
6. 指定校訪問	2016年度		6校へ訪問 (近畿大学附属新宮高等学校・近畿大学附属豊岡高等学校・兵庫県立八鹿高等学校・兵庫県立須磨東高等学校・雲雀丘学園高等学校・親和女子高等学校)	
7. 薬学部・作業環境測定	2016年4月から(年2回実施)2020年3月		薬学部内の取りまとめ、および測定依頼先との調整	
8. 指定校訪問	2018年度		3校へ訪問 (兵庫県立八鹿高等学校・兵庫県立須磨東高等学校・親和女子高等学校)	
9. 模擬授業(百合学院高等学校)	2018年3月14日		「薬学での学び～『基礎』から『最先端』まで」というテーマにて実施	
10. 女性研究者研究活動支援委員	2018年4月から2019年3月		拝命	
11. 模擬授業(兵庫県立伊丹高等学校)	2018年7月17日		「薬学での学び～『基礎』から『最先端』まで」というテーマにて実施	
12. 指定校訪問	2019年度		3校へ訪問 (大阪市立高等学校・大阪府立豊中高等学校・親和女子高等学校)	
13. 教務委員	2019年4月から2022年3月		拝命	
14. 地域別教育懇談会(広島)	2019年8月24日		薬学部・教務委員として参画	
15. 指定校訪問	2021年度		2校へ訪問 (兵庫県立尼崎小田高等学校・兵庫県立明石高等学校)	
16. 入試問題作成委員	2021年4月から		拝命	
17. 指定校訪問	2022年度		6校へ訪問 (滝川第二高等学校・兵庫県立神戸高塚高等学校・兵庫県立伊丹高等学校・賢明学院高等学校・山口県立光高等学校・サビエル高等学校)	
18. 幹事教授	2022年4月から		拝命	
19. 模擬授業(兵庫県立尼崎北高等学校)	2022年7月15日		「化学のチカラ～薬学への招待」というテーマにて実施	
20. 分野別説明会(賢明学院高等学校)	2022年10月19日		予定	
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Cross Coupling and Heck-Type Reactions 2	共	2013年03月	Thieme	遷移金属触媒を用いた炭素-水素結合(C-H)官能基化による炭素-酸素結合および炭素-硫黄結合形成反応に関する章(pp.395-437)を担当。 (共著者: John F. Hartwig, Melanie S. Sanford 他)
2 学位論文				
1. 効率的複素環構築法の開発を指向した新規遷移金属触媒反応の開拓	単	2006年01月	東北大学	遷移金属触媒として「パラジウム」および「ニッケル」を用いた新規素反応の開発と、それらを基盤とした効率的複素環構築法の開拓に関する博士論文。
3 学術論文				
1. Photoinduced Cyclorelease for	共	2000年05月	Journal of Combinatorial	固相担体上での「パラジウム触媒 Mizoroki-Heck 反応」と続く「光照射によるアルケンの異性化～環化反応」というプロセス(光照射

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Condensed Heteroaromatic Synthesis (査読付)			Chemistry 2000, 2(3), 232-233 (American Chemical Society)	cyclorelease) を利用した, 2-quinolinone および coumarin 合成. (Yoshinori Kondo,* <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takao Sakamoto)
2. Palladium Catalyzed Arylation of Malonate Accompanying <i>in situ</i> Dealkoxycarbonylation (査読付)	共	2001年12月	Chemical Communications 2001, (24), 2704-2705 (Royal Society of Chemistry)	パラジウム触媒による芳香族ハロゲン化物のマロン酸エステルとのカップリング反応と続く脱アルコキシカルボニル化反応を経由する, ワンポット "アリール酢酸" 化合物合成. (Yoshinori Kondo,* <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Masanobu Uchiyama, and Takao Sakamoto)
3. Efficient Synthesis of 3-Substituted Indazoles Using Pd-Catalyzed Intramolecular Amination Reaction of <i>N</i> -Tosylhydrazones (査読付)	共	2004年08月	Chemistry Letters 2004, 33(8), 1026-1027 (The Chemical Society of Japan)	2-ハロフェニルヒドラゾン化合物のパラジウム触媒分子内 Buchwald-Hartwig アミノ化反応を利用した, 3 位置換インダゾール化合物合成. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Mika Katsuno, Takashi Yoshino, Ikue Suzuki, Kou Hiroya, and Takao Sakamoto*)
4. Highly Efficient Nickel-Catalyzed Heck Reaction Using Ni(acac) ₂ / <i>N</i> -Heterocyclic Carbene Catalyst (査読付)	共	2005年06月	Synlett 2005, (10), 1624-1626 (Thieme)	<i>N</i> -複素環式カルベンをリガンドとして用いることで, 進行が困難であるとされてきたニッケル触媒による Mizoroki-Heck 反応が円滑に進行することを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, and Takao Sakamoto)
5. Highly Regioselective Palladium-Catalyzed Annulation Reactions of Heteroatom-Substituted Allenes for Synthesis of Condensed Heterocycles (査読付)	共	2005年11月	Chemical & Pharmaceutical Bulletin 2005, 53(11), 1502-1507 (The Pharmaceutical Society of Japan)	アルファ位にヘテロ原子 (酸素または窒素原子) を有するアレン類の芳香族ハロゲン化物とのパラジウム触媒環化反応が高位置選択的に進行し, 単一の複素環化合物を与えることを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Akio Yamamoto, Kazutoshi Ohsawa, Kou Hiroya,* and Takao Sakamoto)
6. Synthesis and Catalytic Activity of a Pincer-Type Bis(imidazolin-2-ylidene) Nickel (II) Complex (査読付)	共	2006年06月	Organometallics 2006, 25(12), 3095-3098 (American Chemical Society)	ニッケルを中心金属とするビスカルベン型ピンサー錯体の新規合成と構造決定, および触媒的活用. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* Jun-ichi Kuroda, Kou Hiroya, Yukio Noda, Masashi Watanabe, and Takao Sakamoto)
7. Synthesis of 3-Substituted Indazoles and Benzoisoxazoles via Pd-Catalyzed Cyclization Reactions: Application to the Synthesis of	共	2007年03月	Tetrahedron 2007, 63(12), 2695-2711 (Elsevier)	パラジウム触媒分子内炭素-窒素結合および炭素-酸素結合形成反応を利用した, 3 位置換インダゾールおよびベンズイソキサゾール化合物合成および本手法を利用する天然物 nigellicine の全合成. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* Mika Katsuno, Takashi Yoshino, Yukari Arai, Kou Hiroya,* and Takao Sakamoto)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Nigellicine (査読付)				
8. Palladium-Catalyzed C-H Activation/ Intramolecular Amination Reaction : A New Route to 3-Aryl/ Alkylindazoles (査読付)	共	2007年07月	Organic Letters 2007, 9(15), 2931-2934 (American Chemical Society)	パラジウム触媒による C-H アミノ化反応を利用した、ヒドラゾン化合物の閉環反応による新規インダゾール骨格構築法. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Tadataka Saito, Mika Katsuno, Takao Sakamoto, and Kou Hiroya*)
9. Catalytic Activities of a Bis(carbene)-Derived Nickel(II)-Pincer Complex in Kumada-Tamao-Corriu and Suzuki-Miyaura Coupling Reactions in the Synthesis of Biaryl Compounds (査読付)	共	2007年09月	Synthesis 2007, (18), 2853-2861 (Thieme)	ビスカルベン型ニッケルピンサー錯体が, Suzuki-Miyaura カップリングおよび Kumada-Tamao-Corriu カップリングの優れた触媒となることを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Jun-ichi Kuroda, Takao Sakamoto, and Kou Hiroya)
10. Palladium-Catalyzed Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via a C-H Functionalization/ Intramolecular C-S Bond Formation Process (査読付)	共	2008年11月	Organic Letters 2008, 10(22), 5147-5150 (American Chemical Society)	パラジウム触媒存在下, C-H 官能基化/分子内 C-S 結合形成反応を経由する, チオベンズアニリド類からのベンゾチアゾール化合物合成法の開発. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
11. Palladium-Catalysed Direct Synthesis of Benzo [b]thiophenes from Thioenols (査読付)	共	2008年11月	Chemical Communications 2008, (43), 5529-5531 (Royal Society of Chemistry)	チオエノール類の閉環反応によるベンゾチオフェン環構築がパラジウム触媒を用いることで円滑に進行することを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Yukari Arai, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
12. A New Approach to 3-Substituted Indoles through Pd-Catalyzed C-H Activation Followed by Intramolecular Amination Reaction of Enamines (査読付)	共	2008年12月	Synlett 2008, (20), 3157-3162 (Thieme)	エナミド類のパラジウム触媒分子内 C-H アミノ化反応を利用したインドール合成. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Tadataka Saito, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
13. Synthesis of 6Z-Pandanamine by Regioselective Cyclization Reaction of 2-En-4-ynoic Acid Derivatives Promoted by Weak Base (査読付)	共	2009年01月	Heterocycles 2009, 77(1), 493-504 (The Japan Institute of Heterocyclic Chemistry)	塩基をプロモーターとする 2-エン-4-インカルボン酸の位置選択的環化反応を鍵とする, 天然物 6Z-pandanamine の全合成. (Kou Hiroya, * Kazuya Takuma, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takayuki Doi)
14. Pincer-type Bis	共	2009年02月	Journal of	ビスカルベン型ニッケル-ピンサー錯体群の新規合成と X 線結晶構

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
(carbene)-Derived Complexes of Nickel(II): Synthesis, Structure, and Catalytic Activity (査読付)			Organometallic Chemistry 2009, 694(3), 389-396 (Elsevier)	造解析・NMR 等の分光学的手段による詳細な構造決定、およびそれらの Suzuki-Miyaura カップリングにおける触媒活性の評価. (Kiyofumi Inamoto,* Jun-ichi Kuroda, Eunsang Kwon, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
15. NHC (N-Heterocyclic Carbene)-Derived Nickel-Pincer Complexes: Efficient and Applicable Catalysts for Suzuki-Miyaura Coupling Reactions of Aryl/Alkenyl Tosylates and Mesylates (査読付)	共	2009年05月	European Journal of Organic Chemistry 2009, (14), 2251-2261 (Wiley)	ビスカルベン型ニッケル-ピンスー錯体の触媒活性評価により、反応性の低い芳香族トシレート・メシレート類を求電子剤とする Suzuki-Miyaura カップリング反応が高収率で進行することが明らかとなった. (Jun-ichi Kuroda, Kiyofumi Inamoto,* Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
16. Synthesis of the Core Ring System of Awajanomycin from N-Boc-3-methoxycarbonyl-2-pyridinone (査読付)	共	2009年05月	Tetrahedron Letters 2009, 50 (18), 2115-2118 (Elsevier)	Lewis 酸触媒存在下における 2-ピリジノンとシリルエノールエーテルの立体選択的付加反応を鍵とする、天然物 awajanomycin の核となる環構造部分の合成. (Kou Hiroya,* Kei Kawamoto, Kiyofumi Inamoto, Takao Sakamoto, and Takayuki Doi)
17. Development of Diastereoselective Birch Reduction-Alkylation Reactions of Bi- and Tricyclic β -alkoxy- α,β -unsaturated Ketones (査読付)	共	2009年09月	The Journal of Organic Chemistry 2009, 74(17), 6623-6630 (American Chemical Society)	二環性 α -アルコキシ- α,β -不飽和カルボニル化合物に対するジアステレオ選択的な Birch 還元-アルキル化プロセスにより、新規な不斉第四級炭素構築法を確立した. (Kou Hiroya,* Yusuke Ichihashi, Ai Furutono, Kiyofumi Inamoto, Takao Sakamoto, and Takayuki Doi)
18. Palladium-Catalyzed Intramolecular Amidation of C(sp ²)-H Bonds: Synthesis of 4-Aryl-2-quinolinones (査読付)	共	2010年06月	The Journal of Organic Chemistry 2010, 75(11), 3900-3903 (American Chemical Society)	パラジウム触媒を用いた C-H 官能基化~分子内アミド化による 4-アリール-2-キノリノン合成. (Kiyofumi Inamoto,* Tadataka Saito, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
19. Facile Synthesis of Asymmetric Quaternary Centers Based on Diastereoselective Protection of the Carbonyl Group at the Symmetrical Position (査読付)	共	2010年07月	Tetrahedron Letters 2010, 51 (29), 3728-3731 (Elsevier)	対称性化合物である 1,3-シクロアルカンジオンのジアステレオ選択的なアセタール形成反応を用いる不斉第四級炭素構築法の開発. (Kou Hiroya,* Yusuke Ichihashi, Yoshihiro Suwa, Tetsuro Ikai, Kiyofumi Inamoto, and Takayuki Doi)
20. Facile Conversion of Thioamides to the Corresponding Amides in the Presence of	共	2010年09月	Synthesis 2010, (18), 3087-3090 (Thieme)	テトラブチルアンモニウムブロミドを用いた、様々なチオアミド類の脱硫反応による新規アミド化合物合成法の開発. (Kiyofumi Inamoto,* Mitsugu Shiraiishi, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Tetrabutylammonium Bromide (査読付) 21. Use of Molecular Oxygen as a Reoxidant in the Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization/Intramolecular C-S Bond Formation (査読付)	共	2010年10月	Advanced Synthesis & Catalysis 2010, 352(14+15), 2643-2655 (Wiley)	酸素をクリーンな酸化剤として用いた、パラジウム触媒 C-H 官能基化～分子内 C-S 形成プロセスによるベンゾチアゾール合成. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
22. Total Synthesis of Optically Active Lycopladiene A by Utilizing Diastereoselective Protection of Carbonyl Group in a 1,3-Cyclohexanedione Derivative (査読付)	共	2011年05月	The Journal of Organic Chemistry 2011, 76(11), 4522-4532 (American Chemical Society)	天然物 'lycopladiene A' の全合成を達成した. (Kou Hiroya, * Yoshihiro Suwa, Yusuke Ichihashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takayuki Doi)
23. Micellar System in Copper-Catalysed Hydroxylation of Arylboronic Acids: Facile Access to Phenols (査読付)	共	2011年10月	Chemical Communications 2011, 47(42), 11775-11777 (Royal Society of Chemistry)	水溶媒中での芳香族ボロン酸のフェノールへの変換反応が, 界面活性剤存在下進行することを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
24. A Copper-Based Catalytic System for Carboxylation of Terminal Alkynes: Synthesis of Alkyl 2-Alkynoates (査読付)	共	2012年02月	Organic & Biomolecular Chemistry 2012, 10(8), 1514-1516 (Royal Society of Chemistry)	末端アセチレン類の二酸化炭素によるカルボキシル化を, 銅触媒を用いることで達成した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Narumi Asano, Koji Kobayashi, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
25. Use of Dimethyl Carbonate as a Solvent Greatly Enhances the Biaryl Coupling of Aryl Iodides and Organoboron Reagents without Adding Any Transition Metal Catalysts (査読付)	共	2012年02月	Chemical Communications 2012, 48(23), 2912-2914 (Royal Society of Chemistry)	ジメチルカーボネートを溶媒に用いることで, Suzuki-Miyaura カップリングが遷移金属触媒を添加せずとも進行することが明らかとなった. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, Yoshinori Kondo, Takao Osako, Yasuhiro Uozumi, and Takayuki Doi*)
26. Tandem-Type Pd(II)-Catalyzed Oxidative Heck Reaction/Intramolecular C-H Amidation Sequence: A Novel Route to 4-Aryl-2-Quinolinones (査読付)	共	2012年04月	Chemical Communications 2012, 48(36), 4332-4334 (Royal Society of Chemistry)	酸化的 Heck 反応と続く分子内 C-H アミド化というタンデムプロセスを基盤とする 2-キノリノン類合成法の開発を行った. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Yoshinori Kondo, and Takayuki Doi*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
付) 27. Synthesis of 3-Carboxylated Indoles through a Tandem Process Involving Cyclization of 2-Ethynylanilines Followed by CO ₂ Fixation in the Absence of Transition Metal Catalysts (査読付)	共	2012年05月	Organic Letters 2012, 14(10), 2622-2625 (American Chemical Society)	メタルフリー条件下、2-エチニルアニリン類の閉環と続く 3 位での二酸化炭素固定化というタンデム型プロセスを利用した、3-カルボキシリンドール類合成。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Narumi Asano, Yuka Nakamura, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
28. A Highly Sensitive Fluorescence Method Reveals the Presence of Palladium in a Cross-Coupling Reaction Mixture Not Treated with Transition Metals (査読付)	共	2012年06月	Tetrahedron Letters 2012, 53 (25), 3147-3148 (Elsevier)	超高感度蛍光法による、反応系中の痕跡量のパラジウムの定量。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Laura D. Campbell, Takayuki Doi, and Kazunori Koide*)
29. Palladium-Catalyzed C-H Cyclization in Water: A Milder Route to 2-Arylbenzothiazoles (査読付)	共	2012年06月	Synlett 2012, 23 (11), 1678-1682 (Thieme)	パラジウム触媒 C-H 閉環反応による 2-アリアルベンゾチアゾール合成が、穏和な条件下「水中」で行えることを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, and Yoshinori Kondo*)
30. Efficient Use of a Surfactant for Copper-Catalyzed Coupling Reaction of Arylboronic Acids with Imidazoles in Water (査読付)	共	2012年09月	Tetrahedron 2012, 68(38), 7794-7798 (Elsevier)	界面活性剤使用により、水中での銅触媒 Chan-Lam カップリングを実現した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, Jun Kadokawa, and Yoshinori Kondo*)
31. Organocatalytic Deprotonative Functionalization of C(sp ²)-H and C(sp ³)-H Bonds Using <i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases (査読付)	共	2012年09月	Chemical Communications 2012, 48(78), 9771-9773 (Royal Society of Chemistry)	アミノシランとフッ化オニウムより系内で生成するオニウムアミド塩基を用いた、複素環類の脱プロトン化と続く求電子剤との反応を達成した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Hitomi Okawa, Hiroshi Taneda, Maomi Sato, Yutaro Hirono, Misato Yonemoto, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
32. Carboxylation of Alkynylsilanes with Carbon Dioxide Mediated by Cesium Fluoride in DMSO (査読付)	共	2013年05月	Organic & Biomolecular Chemistry 2013, 11(23), 3773-3775 (Royal Society of Chemistry)	アルキニルシランのセシウムフルオリドによる活性化を利用した二酸化炭素固定化を行った。 (Misato Yonemoto-Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yoshiyuki Tanaka, and Yoshinori Kondo*)
33. Organocatalytic Functionalization of Heteroaromatic N-Oxides with C-Nucleophiles Using	共	2013年06月	Organic & Biomolecular Chemistry 2013, 11(27), 4438-4441	系内発生のオニウムアミド塩基により、メタルフリー条件下における N-オキシド類のアルファ位アルキニル化およびヘテロアリアル化を達成した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Yuta Araki, Shoko Kikkawa, Misato Yonemoto, Yoshiyuki Tanaka, and Yoshinori Kondo*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
<i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases (査読付)			(Royal Society of Chemistry)	
34. Ruthenium-Catalyzed Carbonylative C-H Cyclization of 2-Arylphenols: A Novel Synthetic Route to 6 <i>H</i> -Dibenzo[<i>b, d</i>]pyran-6-ones (査読付)	共	2013年08月	Organic Letters 2013, 15(15), 3962-3965 (American Chemical Society)	ルテニウム触媒による一酸化炭素挿入を介した C-H 閉環反応を利用し、生理活性化合物として広く存在する複素環であるジベンゾピラノン骨格を効率的に合成できることを見出した。 (Kiyofumi Inamoto,* Jun Kadokawa, and Yoshinori Kondo*)
35. Facile Deprotection of Dithioacetals by Using a Novel 1,4-Benzoquinone/cat. NaI System (査読付)	共	2013年11月	Tetrahedron 2013, 69(44), 9192-9199 (Elsevier)	1,4-ベンゾキノンと触媒量の NaI の組み合わせが、ジチオアセタール類の脱保護に有効であることを明らかにした。 (Kiyofumi Inamoto,* Tetsuya Yamada, Sei-ichi Kato, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
36. Desilylative Carboxylation of Aryltrimethylsilanes Using CO ₂ in the Presence of Catalytic Phosphazanium Salt (査読付)	共	2014年04月	Chemistry Letters 2014, 43(4), 477-479 (The Chemical Society of Japan)	ホスファゼニウム塩を用いるアリールトリメチルシラン化合物の「脱シリル化-二酸化炭素固定化」プロセスを利用した、簡便なアリールカルボン酸合成法を確立した。 (Misato Yonemoto-Kobayashi, Kiyofumi Inamoto, and Yoshinori Kondo*)
37. Direct Condensation of Functionalized sp ³ Carbons with Formanilides for Enamine Synthesis Using an <i>in situ</i> Generated HMDS Amide Catalyst (査読付)	共	2014年06月	Chemical Communications 2014, 50(49), 6523-6525 (Royal Society of Chemistry)	トリメチルシリルアミンと触媒量のセシウムフルオリドから系内で発生する HMDS アミド塩基を用いることで、官能基化されたエナミン類が簡便に合成できることを見出した。 (Hiroshi Taneda, Kiyofumi Inamoto, and Yoshinori Kondo*)
38. Hg ²⁺ -Trapping Beads: Hg ²⁺ -Specific Recognition through Thymine-Hg(II)-Thymine Base Pairing (査読付)	共	2014年07月	Chemical and Pharmaceutical Bulletin 2014, 62(7), 709-712 (The Pharmaceutical Society of Japan)	オリゴチミジン側鎖を有するポリスチレンビーズを合成し、それが水銀イオン補足剤として有効に機能することを見出した。 (Mitsuhiro Kuriyama, Kaichiro Haruta, Takenori Dairaku, Takuya Kawamura, Shoko Kikkawa, Kiyofumi Inamoto, Hirokazu Tsukamoto, Yoshinori Kondo, Hidetaka Torigoe, Itaru Okamoto, Akira Ono, Eugene Hayato Morita,* and Yoshiyuki Tanaka*)
39. Use of Tetramethylammonium Fluoride (TMAF) and Alkali Metal Alkoxides as an Activator for Catalytic Deprotonative Functionalization of Heteroaromatic C(sp ²)-H Bonds (査読付)	共	2014年10月	Tetrahedron 2014, 70(43), 7917-7922 (Elsevier)	TMAF またはアルカリ金属アルコキシドを活性化剤として用いることで、オニウムアミド塩基による芳香族脱プロトン化が円滑に進行し、ケトンやアルデヒドなどの求電子剤との付加体が収率よく得られることを見出した。 (Kiyofumi Inamoto,* Hitomi Okawa, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
40. Unusual <i>O</i> -Alkylation of 2-	共	2015年07月	Chemical and Pharmaceutical	2-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノンとメトキシメチルクロリドの反応により、通常の <i>O</i> -MOM 化体に加え、予期しない <i>O</i> -メチル化体が生成

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Hydroxy-1,4-naphthoquinone Utilizing Alkoxyethyl Chlorides (査読付)			Bulletin 2015, 63(7), 485-488 (The Pharmaceutical Society of Japan)	することが判明した。詳細な反応条件のスクリーニングの結果、用いる塩基を変えることで、これらの化合物を高選択的に作りわたることが可能であることが分かった。 (Tokutaro Ogata,* Tomoyo Yoshida, Manami Tanaka, Chie Fukuhara, Maki Shimizu, Junko Ishii, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
41. The First Enantioselective Total Synthesis of Lantalucratin C and Determination of Its Absolute Configuration (査読付)	共	2015年08月	Tetrahedron 2015, 71(38), 6672-6680 (Elsevier)	抗腫瘍活性を示す天然物である lantalucratin C の、初の不斉全合成と絶対配置の決定を達成した。 (Tokutaro Ogata,* Manami Tanaka, Momoe Ishigaki, Maki Shimizu, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
42. Rhodium-Catalyzed Cyclization of 2-Ethynylanilines in the Presence of Isocyanates: Approach toward Indole-3-carboxamides (査読付)	共	2016年02月	Organic Letters 2016, 18(4), 748-751 (American Chemical Society)	ロジウム触媒を用いた 2-エチルアニリン誘導体の閉環反応をイソシアネート化合物存在下行うことにより、インドール-3-カルボキサミド化合物が効率的に得られることを見出した。 (Akiho Mizukami, Yumi Ise, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto</u> *)
43. Unusual, Chemoselective Etherification of 2-Hydroxy-1,4-naphthoquinone Derivatives Utilizing Alkoxyethyl Chlorides: Scope, Mechanism and Application to the Synthesis of Biologically Active Natural Product (±)-Lantalucratin C (査読付)	共	2016年03月	Tetrahedron 2016, 72(11), 1423-1432 (Elsevier)	アルコシアルキルクロライドと塩基を用いることで、2-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノンのエーテル化が進行することを明らかにした。 (Tokutaro Ogata,* Tomoyo Yoshida, Maki Shimizu, Manami Tanaka, Chie Fukuhara, Junko Ishii, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
44. Palladium-Catalyzed Highly Chemoselective Intramolecular C-H Aminocarbonylation of Phenethylamines to Six-Membered Benzolactams (査読付)	共	2016年06月	Organic Letters 2016, 18(11), 2712-2715 (American Chemical Society)	パラジウム触媒による C-Br 結合存在下での選択的分子内 C-H アミノカルボニル化反応により、臭素原子を有する 6 員環ベンゾラクタム類の合成を行った。 (Hiroshi Taneda, <u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* and Yoshinori Kondo*)
45. Simultaneous Functionalization and Cyclization of 2-Ethynylaniline Derivatives to Indoles (査読付)	共	2017年04月	Heterocycles 2017, 95(2), 920-933 (The Japan Institute of Heterocyclic Chemistry)	2-エチルアニリンに対する、銅塩を用いた「環化-官能基化プロセス」により、高度に官能基化されたインドール化合物が収率よく得られることを明らかにした。 (Kou Hiroya,* Shin Itoh, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hiroki Shigehisa, and Takao Sakamoto)
46. Copper-Catalyzed	共	2017年09月	Synthesis 2017,	ウラシル骨格を有するベンズアミジン化合物に対して銅触媒を作用

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Intramolecular C-H Amination: A New Entry to Substituted Xanthine Derivatives (査読付)			49(18), 4183-4190 (Thieme)	させることにより、分子内 C-H アミノ化反応を経由したキサンチン類合成が可能であることを見出した。 (Maki Shimizu, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
47. Rhodium-Catalyzed Synthesis of Benzo [b]thiophene-3-Carboxamides via Cyclization of (<i>ortho</i> -Alkynyl) phenyl Sulfides in the Presence of Isocyanates (査読付)	共	2019年04月	Chemistry Letters 2019, 48(5), 468-470 (The Chemical Society of Japan)	ロジウム触媒によるヘテロ環化反応を利用した、新規な benzo[b]thiophene-3-carboxamide 誘導体合成法を見出した。 (Akiho Mizukami, Maika Tsugita, Mako Shimora, Saki Tanaka, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
48. Retention and Molecular-Recognition Mechanisms of Molecularly Imprinted Polymers for Promazine Derivatives (査読付)	共	2019年12月	Talanta 2019, 205(120149), 1-9 (Elsevier)	プロマジン誘導体に対するモレキュラーインプリントポリマーを合成し、それらの分子認識能の評価をおこなった。 (Jun Haginaka,* Kanae Nishimura, Tetsutaro Kimachi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yoshiji Takemoto, and Yusuke Kobayashi)
49. A Solvent-Dependent Chirality-Switchable Thia-Michael Addition to α, β -Unsaturated Carboxylic Acids Using a Chiral Multifunctional Thiourea Catalyst (査読付)	共	2020年6月	Chemical Science 2020, 11(21), 5572-5576 (Royal Society of Chemistry)	ボロン酸部位を有するチオウレア触媒を用いた、アリールチオール Michael 付加反応において、溶媒をスイッチすることで得られる生成物の立体配置をコントロールできることを見出した。 (Noboru Hayama, Yusuke Kobayashi, Eriko Sekimoto, Anna Miyazaki, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Tetsutaro Kimachi, and Yoshiji Takemoto*)
50. Palladium-Catalyzed Dehydrogenative C-H Cyclization for Isoindolinone Synthesis (査読付)	共	2021年8月	RSC Advances 2021, 11(43), 26988-26991 (Royal Society of Chemistry)	再酸化剤の添加が不要な脱水素型 C-H 閉環プロセスを見出し、新規イソインドリノン合成法を確立した。 (Masahiro Abe,* Kaho Ueta, Saki Tanaka, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
51. Nitrile Synthesis via Desulfonylative-Smiles Rearrangement (査読付)	共	2022年3月	The Journal of Organic Chemistry 2022, 87(6), 4460-4467 (American Chemical Society)	Smiles 転位反応による新規ニトリル化合物合成法を開発した。 (Masahiro Abe,* Sayasa Nitta, Erina Miura, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
52. Site-Selective Iodine Atom Transfer in Fluorinated Alkyl Iodides via 1,5-Hydrogen Atom Transfer (査読付)	共	2022年7月	Chemical Communications 2022, 58(53), 7416-7418 (Royal Society of Chemistry)	フッ素官能基を有するヨウ化アルキルの位置選択的ヨウ素移動反応を開発した。 (Masahiro Abe,* Yuka Yokoi, Aoi Hirata, Yumeno Matsuoka, Tetsutaro Kimachi and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
53. Gold(I)-Catalyzed Heteroannulation of Salicylic Amides with Alkynes: Synthesis of 1,3-Benzoxazin-4-one Derivatives (査読付)	共	2022年8月	Organic Letters 2022, 24(31), 5684-5687 (American Chemical Society)	サリチルアミド類とアルキン類のヘテロ環化反応が、金触媒を用いることで円滑に進行することを見出した。 (Masahiro, Abe,* Megumu Kawamoto, Mayu Inoue, Tetsutaro Kimachi, and Kiyofumi Inamoto*)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化を利用した複素環合成	単	2010年09月	平成22年度化学系学協会東北大会 (盛岡)	触媒的 C-H 官能基化を利用した種々の複素環骨格構築法に関する発表。
2. パラジウムを用いた触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする新規分子変換プロセスの開拓	単	2012年06月	日本薬学会東北支部学術講演会 (仙台)	パラジウムによる触媒的 C-H 官能基化を利用した種々の分子変換プロセス開発に関する発表。
3. 遷移金属触媒および有機分子触媒を駆使する不活性炭素-水素結合修飾反応：触媒的高度分子変換プロセスの開発	単	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	「遷移金属触媒」および「有機分子触媒」を利用した C-H 官能基化に関する発表。
4. 遷移金属触媒を用いた新規プロセスの開発と、その過程で見つけた遷移金属触媒を用いない反応	単	2013年08月	日本薬学会東北支部化学系薬学若手研究者セミナー (仙台)	これまでに見出した遷移金属触媒反応と、その過程で見出したメタルフリープロセスに関する発表。
5. 遷移金属触媒を駆使して複素環をつくる	単	2016年06月	第2回近畿薬学シンポジウム (大阪)	遷移金属触媒反応を利用した複素環構築法に関する、自身のこれまでの成果についての発表
6. 複素環構築を指向する有機合成化学	単	2017年03月	第1回武庫川女子大学薬学部・神戸薬科大学 研究合同発表会 (西宮)	遷移金属を駆使した触媒的炭素-水素結合官能基化による複素環構築に関する、自身のこれまでの研究成果についての発表
2. 学会発表				
1. 光閉環反応を利用するヘテロ環化合物の固相合成	共	1999年10月	第38回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 坂本 尚夫, 根東 義則
2. 光シクロリリス反応を用いるヘテロ環化合物の固相合成	共	1999年11月	第30回複素環化学討論会 (東京)	根東 義則, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
3. 高分子固定化活性メチレンを用いる Pd 触媒クロスカップリング反応	共	2000年03月	日本薬学会第120年会 (岐阜)	稲本 浄文, 坂本 尚夫, 根東 義則
4. ヘテロ原子置換アレンを用いた位置選択的 Pd 触媒閉環反応とその応用	共	2002年03月	日本薬学会第122年会 (千葉)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 中澤 哲郎, 坂本 尚夫
5. パラジウム触媒を用いるヘテロ環新合成法の開発	共	2002年12月	第32回複素環化学討論会 (徳島)	稲本 浄文, 鈴木 郁恵, 廣谷 功, 坂本 尚夫
6. Pd 触媒アミノ化反応によるインダゾール	共	2003年03月	日本薬学会第123年会	稲本 浄文, 鈴木 郁恵, 廣谷 功, 坂本 尚夫

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
環構築とその Nigellidine 合成への応用			(長崎)	
7. Pd 触媒アミノ化反応を鍵とした Nigellidine の合成研究	共	2003年10月	第4 2回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 吉野 崇, 廣谷 功, 鈴木 郁恵, 坂本 尚夫
8. Pd 触媒によるインダゾール環構築と Nigellidine 合成への応用	共	2003年10月	第3 3回複素環化学討論会 (札幌)	稲本 浄文, 吉野 崇, 廣谷 功, 鈴木 郁恵, 坂本 尚夫
9. 酸素原子置換アレンのパラジウム触媒による閉環反応の開発	共	2004年10月	第4 3回日本薬学会東北支部大会 (秋田)	廣谷 功, 明石 隆信, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
10. ヘテロ原子置換アレンを用いるヘテロ環化合物合成法の開発と応用	共	2004年10月	第3 0回反応と合成の進歩シンポジウム (札幌)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 坂本 尚夫
11. パラジウム触媒反応を用いる新規縮合複素環構築法の開発	共	2004年11月	第3 4回複素環化学討論会 (金沢)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 吉野 崇, 勝野 良佳, 根東 義則, 坂本 尚夫
12. N-ヘテロサイクリックカルベンを配位子とする遷移金属触媒反応の検討	共	2005年03月	日本薬学会第1 25年会 (東京)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
13. N-ヘテロサイクリックカルベンリガンドを用いる遷移金属触媒反応の検討	共	2005年05月	第1 6回万有仙台シンポジウム (仙台)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
14. N-ヘテロサイクリックカルベンを配位子とする新規遷移金属触媒反応の開発	共	2005年05月	第3 回次世代を担う有機化学シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
15. カルベンをリガンドとして用いるニッケル触媒反応の開発	共	2005年09月	平成1 7年度化学系学協会東北大会 (仙台)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
16. 分子内パラジウム触媒反応による効率的縮合複素環化合物構築法の開発と応用	共	2005年11月	第3 1回反応と合成の進歩シンポジウム (神戸)	稲本 浄文, 勝野 良佳, 廣谷 功, 坂本 尚夫
17. Investigation of Transition Metal-Catalyzed Reactions Using Pincer-Type N-Heterocyclic Carbene Ligands	共	2005年12月	2005 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (ホノルル, ハワイ)	Kiyofumi Inamoto, Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, Takao Sakamoto
18. Combination of Nickel/N-Heterocyclic Carbene (NHC) as a Novel Catalyst System for the Nickel-Catalyzed Heck Reaction	共	2005年12月	2005 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (ホノルル, ハワイ)	Kiyofumi Inamoto, Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, Takao Sakamoto
19. Pincer型カルベンリガンドを用いるニッ	共	2007年03月	日本薬学会第1 27年会	稲本 浄文, 黒田 潤一, 廣谷 功, 坂本 尚夫

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ケル触媒クロスカップリング反応の検討	単	2007年07月	(富山) 第4 2回天然物化学談話会 (仙台)	稲本 浄文
20.10 ヶ月にわたるアメリカ・MIT での研究生活を終えて				
21. Catalytic Activities of a Pincer-Type Bis(imidazolin-2-ylidene) Nickel (II) Complex in Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides	共	2007年08月	14h IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (奈良)	Kiyofumi Inamoto, Jun-ichi Kuroda, Takao Sakamoto, Kou Hiroya
22. Pd(II)-Catalyzed C-H Activation/Intramolecular Amination Reaction: A New Route to 3-Substituted Indazoles	共	2007年08月	14h IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (奈良)	Kiyofumi Inamoto, Tadataka Saito, Mika Katsuno, Takao Sakamoto, Kou Hiroya
23. 分子内アリル化反応を利用するベンジル位不斉 4 級炭素構築法の開発と応用	共	2007年10月	第4 6回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 中村 優子, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
24. 核間位第四級炭素構築法の開発と Trichothecene 骨格を有する天然物 Scripene の全合成への応用	共	2007年10月	第4 6回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 古殿 愛, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
25. Pincer 型カルベンを配位子とする鉄錯体の合成と触媒反応への応用	共	2007年10月	第4 6回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 山本 明生, 廣谷 功, 坂本 尚夫
26. 抗腫瘍活性天然物 Stephacidin A の不斉全合成研究	共	2007年10月	第4 6回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 小池 磨由, 松本 重充, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
27. NHC 由来 pincer 型ニッケル錯体の合成とその触媒反応への応用	共	2007年11月	第3 3回反応と合成の進歩シンポジウム (長崎)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 坂本 尚夫, 廣谷 功
28. 2-ピリジノン誘導体の官能基化法の開発と Awajanomycin の合成研究	共	2007年11月	第3 3回反応と合成の進歩シンポジウム (長崎)	廣谷 功, 川本 啓, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
29. 分子内アリル化反応を基盤とする多環性キノロン誘導体の合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第1 28年会 (横浜)	廣谷 功, 中村 優子, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
30. パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を経由する、置換インドールおよびベンゾチオフェン類の合成	共	2008年03月	日本薬学会第1 28年会 (横浜)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 齋藤 孔隆, 坂本 尚夫, 廣谷 功

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
31.白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
32.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化・分子内アミノ化反応を利用した, 新規インダゾール合成法の開発	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 勝野 良佳, 坂本 尚夫, 廣谷 功
33.非対称化による不斉第四級炭素構築法を基盤とする(-)-Cepharamineの全合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 関岡 竜一, 淵野 光記, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
34. Peperomia Duclouxii から単離されたポリケチドの不斉全合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
35. Michael Addition of Silyl Ketene Acetal to 2-Pyridinone Derivatives: Reactivity and Application to Synthetic Study of Awajanomycin	共	2008年06月	17th International Symposium on Organic Synthesis (デジョン, 韓国)	Kou Hiroya, Kei Kawamoto, Kiyofumi Inamoto, Takayuki Doi
36. Synthesis and Catalytic Activity of N-Heterocyclic Carbene-Derived Pincer-Type Nickel (II) Complexes	共	2008年06月	17th International Symposium on Organic Synthesis (デジョン, 韓国)	Kiyofumi Inamoto, Jun-ichi Kuroda, Kou Hiroya, Takayuki Doi
37. パラジウム触媒閉環反応を利用する新規ベンゾチオフェン環構築法の開発	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会 (青森)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 廣谷 功, 土井 隆行
38. パラジウム触媒を用いたチオエノール類からの直接的ベンゾチオフェン化合物合成法の開発	共	2008年10月	第47回日本薬学会東北支部大会 (岩手)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 廣谷 功, 土井 隆行
39. 非対称化を基盤とする不斉第四級炭素構築法を用いた(-)-Cepharamineの全合成研究	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会 (青森)	廣谷 功, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行
40. ベータ-オキソエノンに対する核間位不斉炭素構築法の開発とその応用	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会 (青森)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
41. 対称化合物の非対称化反応による不斉第四級炭素構築法の開発とその応用	共	2008年10月	第34回反応と合成の進歩シンポジウム (京都)	廣谷 功, 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 川住 宗生, 稲本 浄文, 土井 隆行
42. NHC由来 pincer 型ニッケル錯体の合成とその触媒機能の開	共	2008年10月	第34回反応と合成の進歩シンポジウム	黒田 潤一, 稲本 浄文, 廣谷 功, 土井 隆行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
発 43.白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年10月	(京都) 第34回反応と合成の進歩シンポジウム	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 土井 隆行
44.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する,新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2008年10月	(京都) 第47回日本薬学会東北支部大会(岩手)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
45.白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年10月	第47回日本薬学会東北支部大会(岩手)	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 土井 隆行
46.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を利用する新規置換インドール類合成法の開発	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
47.シリルケテンアセタールの2-ピリジノン誘導体への求核付加反応を基盤とする含窒素生理活性化合物の合成研究	共	2008年11月	第27回メディシナルケミストリーシンポジウム(大阪)	廣谷 功, 川本 啓, 稲本 浄文, 土井 隆行
48.非対称化反応を基盤とする不斉第四級炭素構築法を用いた(-)-Cepharamineの全合成研究	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	廣谷 功, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行
49.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を利用する効率的含硫黄複素環化合物構築法の開発	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
50.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化を利用した効率的含硫黄複素環化合物構築法の開発	共	2008年11月	第27回メディシナルケミストリーシンポジウム(大阪)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
51.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する,新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
52.パラジウム触媒を用いた分子内 Tsuji-Trost 反応によるベータ-アルケニル-アルファ-アリールシクロペンタノン誘導体の不斉合成研究	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	廣谷 功, 星野 恒文, 中村 優子, 稲本 浄文, 土井 隆行
53.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化を利用した効率的含窒素複素環化合	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
物構築法の開発				
54.パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化を利用した効率的複素環化合物構築手法の開発	共	2009年06月	第95回有機合成シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
55.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年06月	第6回東北大学バイオサイエンスシンポジウム	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
56. Synthesis of Nitrogen-Based Heterocyclic Compounds via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization	共	2009年07月	15th IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 15) (グラスゴー, イギリス)	Kiyofumi Inamoto, Tadataka Saito, Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, Takayuki Doi
57. Palladium-Catalyzed C-H Functionalization for the Synthesis of Heterocyclic Compounds	共	2009年09月	第56回有機金属化学討論会 (京都)	Kiyofumi Inamoto, Tadataka Saito, Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi
58. 非対称化反応を基盤とした不斉第四級炭素構築法の開発	共	2009年10月	第48回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 猪飼 哲朗, 稲本 浄文, 土井 隆行
59. パラジウム触媒による C?H アミノ化反応を利用した 4-アリアル-2-キノロン類合成	共	2009年10月	第48回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
60. パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内アミノ化反応を利用した効率的 2-キノロン誘導体合成法の開発	共	2009年10月	第39回複素環化学討論会 (柏)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
61. 非対称化反応を基盤とする不斉第四級炭素構築法の開発	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 猪飼 哲朗, 稲本 浄文, 土井 隆行
62. パラジウム触媒による分子内炭素-水素結合官能基化を利用した新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年11月	第96回有機合成シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
63. パラジウム触媒を用いた分子内 Tsuji アリル化反応による ベータ-アルケニル-アルファ-アリアルシ	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 星野 恒文, 中村 優子, 稲本 浄文, 土井 隆行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
クロペンタノン誘導体の不斉合成とその応用				
64. 非対称化反応を用いた (-)-Cepharamine の不斉全合成研究	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 市橋 佑介, 猪飼 哲朗, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行
65. 酸素を再酸化剤として利用するパラジウム触媒を用いた C-H 官能基化によるベンゾチアゾール合成	共	2010年03月	日本薬学会第130年会 (岡山)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
66. 不斉非対称化反応を用いた (+)-Lycoplidine A の全合成	共	2010年03月	日本薬学会第130年会 (岡山)	廣谷 功, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
67. パラジウム触媒による分子内 C-H 官能基化を利用したベンゾチアゾール環構築	共	2010年09月	平成22年度化学系学協会東北大会 (盛岡)	稲本 浄文, 川崎 順平, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
68. パラジウム触媒を用いた C-H 閉環反応における酸素の再酸化剤としての利用	共	2010年10月	第40回複素環化学討論会 (仙台)	稲本 浄文, 川崎 順平, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
69. 非対称化を用いた (+)-Lycoplidin A の全合成	共	2010年10月	第40回複素環化学討論会 (仙台)	廣谷 功, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
70. パラジウム触媒を用いた C-H 閉環反応によるベンゾチアゾール合成	共	2010年11月	創薬懇話会 2010 in 蔵王 (蔵王)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
71. 2,2-二置換 1,3-cyclopentanedione 誘導体の非対称化反応を用いる不斉第四級炭素構築法の開発	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	廣谷 功, 三原 健, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
72. ジアステレオ選択的なケタール化反応を利用した 1,3-cyclohexanedione の非対称化反応の開発	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
73. パラジウム触媒による C-H 閉環ベンゾチアゾール合成における酸素の再酸化剤としての利用	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
74. Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization/C-S Bond Formation	共	2011年07月	16th IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (上海)	Kiyofumi Inamoto, Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, and Yoshinori Kondo
75. ホスホニウム塩触媒を用いたベンザインを介する Diels-	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Alder 反応				
76. 有機超強塩基の合成研究とその応用	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
77. 界面活性剤を用いる芳香族ボロン酸のヒドロキシル化反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
78. Synthetic Studies of (-)-Cepharamine Using a Desymmetrization Reaction Based on Diastereoselective Ketalization	共	2011年08月	Tohoku University Global COE Summer School 2011 (仙台)	Kou Hiroya, Yusuke Ichihashi, Kiyofumi Inamoto, and Takayuki Doi
79. Onium Fluoride for C-C Bond Formation Reaction	共	2011年08月	Tohoku University Global COE Summer School 2011 (仙台)	Misato Yonemoto, Yutaro Hirono, Kiyofumi Inamoto, and Yoshinori Kondo
80. パラジウム触媒を用いた分子内炭素-水素結合官能基化プロセスを経由する 2-キノロン構築法の開発	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
81. 有機分子触媒を用いる複素環 N オキシドの変換反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	荒木 勇太, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
82. フッ化オニウムによる炭素-炭素結合形成反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	米本 みさと, 廣野 佑太郎, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則
83. 銅触媒を用いるアセチレンの効率的二酸化炭素挿入反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	浅野 成美, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
84. 金触媒によるジチオアセタール類の加水分解反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	加藤 盛一, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
85. Synthesis of Benzothiazoles from Thiobenzanilides through a Pd-Catalyzed C-H Functionalization/C-S Forming Cyclization Process	共	2011年09月	22nd French-Japanese Symposium of Medicinal and Fine Chemistry (ルーアン, フランス)	Kiyofumi Inamoto, Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, Yoshinori Kondo
86. 二酸化炭素を用いたシクロカルボキシル化を経由する複素環合成	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	浅野 成美, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
87. ホスファゼニウム P5 フルオリドによるベンザインを経由する反応	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
88. 有機触媒を用いる複素環 N オキシドの変換反応	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	荒木 勇太, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
89. オニウム塩触媒によ	共	2011年10月	第50回記念日本	米本 みさと, 荒木 勇太, 廣野 佑太郎, 松井 元志, 大川 ひ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
る炭素-炭素結合形成反応			薬学会東北支部大会 (仙台)	とみ, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則
90. ホスファゼニルホスフィンオキシド触媒を用いた有機ケイ素化合物の活性化および修飾反応	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
91. ホスファゼニウムフルオリド P5F を触媒とするベンザインを介した反応	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
92. 2,2-二置換-1,3-シクロペンタジオン誘導体の非対称化反応の開発	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 三原 健, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
93. 非対称化反応を用いた(-)-cepharamineの不斉全合成研究	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
94. 遷移金属を用いた分子内炭素-水素結合官能基化プロセスを経由する2-キノロン環構築法の開発	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
95. ミセル系における芳香族ボロン酸の銅触媒ヒドロキシル化反応	共	2011年11月	第100回有機合成シンポジウム (東京)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
96. ホスファゼニルホスフィンオキシド触媒による有機ケイ素化合物活性化を介した修飾反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
97. ヨウ化金(I)によるジチオアセタール類の触媒的脱保護反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	加藤 盛一, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
98. 界面活性剤を利用した銅触媒によるアリアルボロン酸の酸化的ヒドロキシル化反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
99. オニウム塩触媒を用いる選択的分子変換反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	米本 みさと, 荒木 勇太, 廣野 佑太郎, 大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則
100. ジアステレオ選択的なケタール化反応を基盤とした(-)-cepharamineの不斉全合成研究	共	2011年11月	グローバル COE プログラム「分子系高次構造体化学国際教育研究拠点」シンポジウム (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
101. ホスファゼニウムフルオリドを用いたアルキニルシランの触媒的芳香族求核置換反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	佐々木 碧, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
102. フッ化物塩を触媒と	共	2012年03月	日本薬学会第13	藤村 英範, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
するハロゲン亜鉛交換反応			2年会 (札幌)	
103. ミセル系におけるアリアルボロン酸の酸化的水ドロキシル化反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
104. フッ化物塩によるアミド塩基発生と触媒的脱プロトン化反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	佐藤 菜央美, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
105. 有機触媒によるトリス(トリメチルシリル)アミンの活性化を介した芳香複素環の修飾反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	大川 ひとみ, 米本 みさと, 廣野 佑太郎, 稲本 浄文, 根東 義則
106. パラジウム触媒によるC-H結合官能基化を基盤とする新規複素環構築手法の開発	共	2012年06月	第101回有機合成シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 川崎 順平, 野澤 佳菜子, 長谷川 千紗, 白石 貢, 廣谷 功, 土井 隆行, 根東 義則
107. フッ化物イオンおよびDMSOを用いた触媒的な亜鉛試薬の活性化	共	2012年06月	第23回万有仙台シンポジウム (仙台)	吉川 晶子, 藤村 英範, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
108. フッ化オニウムによるアミノシランの活性化を介した芳香複素環の修飾反応	共	2012年10月	第51回日本薬学会東北支部大会 (青森)	大川 ひとみ, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
109. フッ化物塩の添加による有機亜鉛試薬の活性化と反応	共	2012年10月	第51回日本薬学会東北支部大会 (青森)	藤村 英範, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
110. パラジウム触媒C-Hアミノ化を基盤とする新規2-キノリノン類合成法の開発	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行, 根東 義則
111. 界面活性剤を用いた水中での銅触媒N-アリアル化反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	稲本 浄文, 門川 純, 野澤 佳菜子, 根東 義則
112. ヨウ化ナトリウム触媒とp-ベンゾキノンによる1,3-ジチアンの脱保護反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	吉川 晶子, 山田 哲也, 加藤 盛一, 稲本 浄文, 根東 義則
113. 有機触媒によるアミノシランの活性化を介した芳香複素環化合物の修飾反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
114. オニウムアミド塩基による触媒的脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2012年11月	第38回反応と合成の進歩シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 種田 宏, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 根東 義則
115. 界面活性剤を用いた銅触媒による水中でのN-アリアル化反応	共	2012年11月	フルオラス科学研究会第5回シンポジウム (仙台)	稲本 浄文, 門川 純, 野澤 佳菜子, 根東 義則
116. 二酸化炭素またはイソシアネート類をC1源としたシクロカルボキシル化を経由する3-カルボキシルインドール誘導体合成	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 中村 悠花, 浅野 成美, 吉川 晶子, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
117. <i>p</i> -ベンゾキノンとヨウ化ナトリウム触媒による 1,3-ジチアンの脱保護反応	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	吉川 晶子, 山田 哲也, 加藤 盛一, 稲本 浄文, 根東 義則
118. オニウムアミド塩基を用いた C(sp ³)-H 脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 種田 宏, 吉川 晶子, 根東 義則
119. ルテニウム触媒 C-H カルボニル化反応を用いたクマリン類の新規合成法の開発	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
120. Carboxylation of Alkynylsilanes Using Carbon Dioxide Mediated by Cesium Fluoride	共	2013年05月	The 23rd French-Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	Misato Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
121. Synthesis of 2-Quinoliones through a Tadem-Type, Pd(II)-Catalyzed Oxidative Heck Reaction/ Intramolecular C-H Amidation Sequence	共	2013年05月	The 23rd French-Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, and Yoshinori Kondo
122. Deprotonative Functionalization of C(sp ³)-H Bonds Using Onium Amide Bases	共	2013年05月	1st International Conference & 6th Symposium on Organocatalysis (大津)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hiroshi Taneda, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo
123. Reactivity of Double-Activated Dialkylzinc Reagents with Fluoride Salts and Donor Solvents	共	2013年05月	The 23rd French-Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	Shoko Kikkawa, Hidenori Fujimura, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
124. Catalytic Deprotonative Functionalization of Heteroarenes by Using Onium Amide Bases	共	2013年06月	1st International Conference & 6th Symposium on Organocatalysis (大津)	Hitomi Okawa, Yutaro Hirono, Shoko Kikkawa, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
125. Phosphazanium Salt Promoted Carboxylation of Aryltrimethylsilanes with CO ₂	共	2013年09月	10th International Symposium on Carbanion Chemistry (京都)	Misato Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
126. Organocatalytic Functionalization Making Use of <i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases	共	2013年09月	10th International Symposium on Carbanion Chemistry (京都)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hitomi Okawa, Yuta Araki, Misato Yonemoto, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo
127. ルテニウム触媒によ	共	2013年10月	第43回複素環化	稲本 浄文, 門川 純, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
る C-H 閉環反応を利用した dibenzopyranone 類合成			学討論会 (岐阜)	
128. 有機亜鉛試薬を用いた、芳香複素環化合物の酸化的カルボニル化反応の開発	共	2013年10月	第43回複素環化学討論会 (岐阜)	藤村 英範, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
129. ルテニウム触媒 C-H カルボニル化を利用したジベンゾピラノン骨格の新規合成法の開発	共	2013年10月	第52回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
130. 芳香族ケイ素化合物のカルボキシル化反応	共	2013年10月	第52回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	小林 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
131. ルテニウム触媒 C-H カルボニル化を用いたジベンゾピラノン骨格の新規構築法の開発	共	2013年11月	第39回反応と合成の進歩シンポジウム (福岡)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
132. オニウムアミド塩基を用いた触媒的 C(sp ³)-H 脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2013年11月	第39回反応と合成の進歩シンポジウム (福岡)	稲本 浄文, 種田 宏, 吉川 晶子, 根東 義則
133. Madelung 型インドール合成の触媒的閉環プロセスの開発	共	2014年03月	日本薬学会第134年会 (熊本)	阿部 将大, 稲本 浄文, 根東 義則
134. 活性化マクロファージの NO 産生を抑制するチオフェン-2-イルおよびチオフェン-3-イルナフトキノンの合成	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	尾形 篤太郎, 岩本 まどか, 稲本 浄文, 西内 亜理沙, 来海 徹太郎
135. 不斉アミノ化を起点とする新規なフッ素導入法の開発と環状アルカロイド類合成への応用	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	清水 麻季, 尾形 篤太郎, 岡島 真澄, 金崎 麻衣, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
136. 抗腫瘍活性を有する天然物 Lantalucratin C の合成研究	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	田中 愛美, 尾形 篤太郎, 石垣 百恵, 吉田 知世, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
137. 不斉アザマイケル-フッ素化連続反応の開発研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	清水 麻希, 尾形 篤太郎, 岡島 真純, 金崎 麻衣, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
138. オルトナフトキノンを骨格を有する抗腫瘍活性天然物 Lantalucratin C の合成研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	尾形 篤太郎, 田中 愛美, 石垣 百恵, 吉田 知世, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
139. 抗腫瘍活性天然物 Rhinacanthins の合成研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	西内 亜理沙, 土江 美冴, 鳥居 恵理, 柴山 友希, 島 綾花里, 尾形 篤太郎, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
140. アルコキシメチルクロリドを用いた 2-hydroxy-1,4-naphthoquinone 類の特異な化学選択的	共	2015年10月	第41回反応と合成の進歩シンポジウム (大阪)	尾形 篤太郎, 吉田 知世, 田中 愛美, 福原 千絵, 清水 麻希, 石井 順子, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 来海 徹太郎

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
エーテル化反応 141. 含ハロゲンフェネチルアミンの Pd 触媒 C(sp ²)-H 結合選択的アミノカルボニル化	共	2015年11月	第45回複素環化学討論会 (東京)	種田 宏, 稲本 浄文, 根東 義則
142. 抗腫瘍活性天然化合物 Rhinacanthins 0, P 側鎖の合成研究	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	西内 亜理沙, 生島 瑞記, 柴山 友希, 島 綾花里, 清水 麻希, 岩本 真奈, 稲本 浄文, 来海 徹太郎
143. ロジウム触媒を用いた 2-エチルアニリン誘導体閉環によるインドール-3-カルボキサミド類の合成	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	水上 玲穂, 伊勢 悠見, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
144. 銅触媒を用いた分子内 C-H アミノ化による新規キサントゲン骨格構築法の開発	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 岩本 真奈, 西内 亜理沙, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
145. 銅触媒を用いた分子内 C-H アミノ化による新規キサントゲン骨格構築法の開発	共	2016年09月	第46回複素環化学討論会 (金沢)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 前田 奈美, 西内 亜理沙, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
146. 触媒的 C-H 閉環反応による新規キサントゲン類合成法の開発	共	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 前田 奈美, 西内 亜理沙, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
147. ロジウム触媒によるタンデム型閉環-付加プロセスを利用した新規インドールおよびベンゾフラン誘導体合成法の開発	共	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪)	水上 玲穂, 山内 彩樺, 伊勢 悠見, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
148. 含ハロゲンフェネチルアミンの Pd 触媒 C(sp ²)-H 結合選択的アミノカルボニル化	共	2016年11月	第110回有機合成シンポジウム (東京)	種田 宏, 稲本 浄文, 根東 義則
149. ロジウム触媒閉環反応を用いた新規 2,3-二置換インドールおよびベンゾフラン合成法の開発	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	水上 玲穂, 伊勢 悠見, 山内 彩樺, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
150. 銅触媒を用いた C-H 閉環反応によるキサントゲン骨格の新規構築法の開発	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	清水 麻希, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
151. 新規ナフトキノン誘導体 6-TMNQ の血管新生および腫瘍増殖に対する抑制効果	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	新屋 智寛, 山村 早紀, 前田 恭佳, 阪中 麻利子, 山下 裕佳, 葉山 登, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 高橋 悟
152. 2016年度薬学部初年次教育 (有機化学) における基礎学力強化教育の運用と評価	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	西村 奏咲, 川崎 郁勇, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 河井 伸之, 北山 友也, 三浦 健, 安井 菜穂美, 三木 知博
153. α, β-不飽和カルボン酸への直截的不斉アザマイケル付加反応による糖尿病薬ン	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	葉山 登, 関本 英里子, 西林 和也, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 小林 祐輔, 竹本 佳司

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
タグリブチンの合成研究				
154. ロジウム触媒閉環反応を利用した新規2,3-二置換ベンゾフラン合成法の開発	共	2017年10月	第47回複素環化学討論会(高知)	水上 玲穂, 林 優奈, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
155. ロジウム触媒を用いた新規2,3-二置換ベンゾフラン合成法の開発	共	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会(神戸)	水上 玲穂, 林 優奈, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
156. 経口投与化を目指したベメトレキセドのモノメドキシミル及びジメドキシミルエステルプロドラッグの合成と評価	共	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会(神戸)	佐野 令奈, 富田 英里, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
157. 経口投与化を目指したベメトレキセドのモノメドキシミル及びジメドキシミルエステルプロドラッグの合成と評価	共	2017年10月	第35回メディシナルケミストリーシンポジウム(名古屋)	佐野 令奈, 富田 英里, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
158. 経口投与化を目指したベメトレキセドのプロドラッグ化の研究	共	2018年03月	日本薬学会第138年会(金沢)	佐野 令奈, 富田 英里, 泉 ありさ, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
159. ロジウム触媒を利用する新規2,3-二置換ベンゾチオフェン環構築法の開発	共	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会(姫路)	稲本 浄文, 水上 玲穂, 次田 舞花, 下良 茉莉, 田中 咲妃, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 來海 徹太郎
160. α , β -不飽和カルボン酸の不斉チアマイケル付加反応の開発	共	2018年11月	第44回反応と合成の進歩シンポジウム(熊本)	葉山 登, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 來海 徹太郎
161. 多機能性ボロン酸触媒を用いる α , β -不飽和カルボン酸の不斉チアマイケル付加反応の開発	共	2019年03月	日本薬学会第139年会(千葉)	葉山 登, 関本 英里子, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 來海 徹太郎
162. ロジウム触媒による閉環反応を利用した, 新規多置換ベンゾチオフェン骨格構築法の開発	共	2019年03月	日本薬学会第139年会(千葉)	水上 玲穂, 次田 舞花, 下良 茉莉, 田中 咲妃, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
163. Synthesis of Benzo [b]thiophene-3-Carboxamides via Rhodium-Catalyzed Cyclization of (<i>ortho</i> -Alkynyl) phenyl Sulfides in the Presence of Isocyanates	共	2019年09月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress (京都)	Akiho Mizukami, Maika Tsugita, Mako Shimora, Saki Tanaka, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto</u>
164. Synthesis of Pemetrexed Medoxomil Ester Prodrugs Aiming for the Oral Administration	共	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress	Kasumi Miyoshi, Noboru Hayama, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Anna Miyazaki, Akira Nakamura, Tomohiro Maegawa, Toru Otori, Kenji Matsuyama, and Tetsutaro Kimachi

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
165. ロジウム触媒閉環反応による新規ベンゾチオフェン環構築法の開発	共	2019年10月	(京都) 第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	田中 咲妃, 水上 玲穂, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
166. 経口投与化を目指したベメトレキセドメドキシミルエステルプロドラッグの研究	共	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	三好 加純, 葉山 登, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
167. 多機能性ボロン酸触媒による不斉共役付加反応の開発とキラルスイッチ反応への展開	共	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 來海 徹太郎
168. The Asymmetric Thia-Michael Addition of α, β -Unsaturated Carboxylic Acid	共	2019年12月	第12回有機触媒シンポジウム (京都)	Noboru Hayama, Eriko Sekimoto, Anna Miyazaki, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yusuke Kobayashi, Yoshiji Takemoto, and Tetsutaro Kimachi
169. 親水性リンカーを用いた抗腫瘍性小分子ペプチドミメティクスの二量化	共	2020年03月	日本薬学会第140年会 (京都)	宮崎 杏奈, 長谷 日和, 葉山 登, 稲本 浄文, 日高 興土, 津田 裕子, 山之内 奈那, 福島 昭二, 來海 徹太郎
170. 経口投与化を目指したベメトレキセドエステルプロドラッグの合成および評価	共	2020年03月	日本薬学会第140年会 (京都)	來海 徹太郎, 三好 加純, 葉山 登, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治
171. プロマジン誘導体に対する分子インプリントポリマーにおける保持および分子認識機構: ハロゲン結合の寄与	共	2020年03月	日本薬学会第140年会 (京都)	西村 奏咲, 來海 徹太郎, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 萩中 淳
172. パラジウム触媒による脱水素型イソインドリノン合成法の開発	共	2021年3月	日本薬学会第141年会 (広島→オンライン)	阿部 将大, 上田 かほ, 田中 咲妃, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
173. 経口投与化を目指したベメトレキセドプロドラッグの新規合成	共	2021年3月	日本薬学会第141年会 (広島→オンライン)	三好 加純, 葉山 登, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
174. ベメトレキセド新規エステルプロドラッグの合成—吸収改善を目指した分子設計—	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	辻森 理那, 三好 加純, 本田 萌, 稲本 浄文, 宮崎杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
175. 吸収改善を目指した新規ベメトレキセドプロドラッグの合成	共	2021年10月	第50回複素環化学討論会 (静岡→オンライン)	三好 加純, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
176. ベメトレキセド新規アミドプロドラッグの合成—トランスポーターの積極的関与を目指した分子設計—	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	北濱 雛子, 三好 加純, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 來海 徹太郎
177. Pd/C 触媒による脱水素型イソインドリノン合成法の開発	共	2021年10月	第50回複素環化学討論会 (静岡→オンライ	阿部 将大, 上田 かほ, 田中 咲妃, 來海 徹太郎, 稲本 浄文

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
178. 1,5-HAT 機構を利用したフルオロアルカンにおける位置選択的なヨウ素移動反応の開発	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
179. Development of Iodine Atom Transfer Reaction Involving 1,5-Hydrogen Atom Transfer Process	共	2021年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (ホノルル, ハワイ→オンライン)	Masahiro Abe, Yuka Yokoi, Aoi Hirata, Tetsutaro Kimachi, Kiyofumi Inamoto
180. Synthesis of Pemetrexed Medoxomil Ester Prodrugs Aiming for the Oral Administration	共	2021年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (ホノルル, ハワイ→オンライン)	Kasumi Miyoshi, Noboru Hayama, Kiyofumi Inamoto , Anna Miyazaki, Akira Nakamura, Tomohiro Maegawa, Toru Ohtori, Kenji Matsuyama, Tetsutaro Kimachi
181. Palladium-Catalyzed C(sp ³)-H Cyclization for Synthesis of Isoindolinones	共	2021年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (ホノルル, ハワイ→オンライン)	Masahiro Abe, Kaho Ueta, Saki Tanaka, Tetsutaro Kimachi, Kiyofumi Inamoto
182. 金触媒によるベンゾオキサジノン合成法の開発	共	2022年3月	日本薬学会第142年会 (名古屋→オンライン)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
183. フルオロアルカンにおけるヨウ素移動反応の開発	共	2022年3月	日本薬学会第142年会 (名古屋→オンライン)	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
184. 脱スルホニル型 Smiles 転位を活用したニトリル合成法の開発	共	2022年9月	第51回複素環化学討論会 (大阪)	阿部 将大, 新田 早優, 三浦 衣莉奈, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
185. 金触媒によるヘテロ環化反応を活用したベンゾオキサジノン骨格の効率的合成法の開発	共	2022年9月	第51回複素環化学討論会 (大阪)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
186. 金触媒によるベンゾオキサジノン骨格の迅速的合成法の開発	共	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
187. 脂肪族フッ素化合物における位置選択的なヨウ素移動反応の開発	共	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
188. 1,5-水素原子移動を	共	2022年11月	第48回反応と合	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 松岡 由芽乃, 来海 徹太

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
活用したフッ素化合物におけるヨウ素原子移動反応の開発			成の進歩シンポジウム (千葉)	郎, 稲本 浄文
3. 総説				
1. パラジウム触媒アミノ化反応を基盤とする効率的インダゾール合成法の開発と応用	単	2008年07月	薬学雑誌 2008, 128(7), 997-1005 (日本薬学会)	パラジウム触媒による "Buchwald-Hartwig アミノ化" と "C-H アミノ化" という 2 つの手法を用いたインダゾール環構築法に関する総説.
2. パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化 ~インダゾール, インドール, ベンゾチオフェン, ベンゾチアゾールの環構築~	共	2010年03月	ファルマシア 2010, 46(3), 229-234 (日本薬学会)	パラジウム触媒による C-H 官能基化を利用する複素環化合物合成についての総説. (稲本 浄文,* 廣谷 功, 土井 隆行*)
3. Synthesis of Heterocyclic Compounds through Palladium-Catalyzed C-H Cyclization Processes	単	2013年10月	Chemical & Pharmaceutical Bulletin 2013, 61(10), 987-996 (The Pharmaceutical Society of Japan)	パラジウムを用いた触媒的 C-H 閉環反応を利用した複素環合成に関する自身の研究成果をまとめた総説.
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. アルキンへの求核攻撃による閉環反応の展開および生理活性化合物全合成への応用	共	2006年4月から2008年3月まで	科研費	基盤研究 (B) (研究分担者)
2. パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を基盤とする新規効率的分子構築法の開拓	単	2007年度	東北大学グローバルCOEプログラム「分子系高次構造体化学国際教育研究拠点」	若手研究奨励費
3. パラジウム触媒「炭素-水素結合活性化」の実用的活用~高効率の分子構築法を目指して	単	2008年4月から2010年3月まで	科研費	若手研究 (B)
4. 触媒的炭素-水素結合 (C-H) 活性化を基盤とする高効率・革新的複素環構築プロセスの確立と体系化	単	2011年度	有機合成化学協会	アステラス製薬研究企画賞
5. パラジウム触媒 C-H 官能基化を基盤とする複素環構築の新展開	単	2011年4月から2013年3月まで	科研費	若手研究 (B)
6. パラジウムを用いた触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする高効率の分子変換プロセスの開発研究	単	2013年度	インテリジェント・コスモス学術振興財団	第12回インテリジェント・コスモス奨励賞

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
7. 新規複素環構築法創出を指向する触媒的炭素-水素結合活性化に関する研究	単	2013年4月から2016年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
8. 触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする複素環合成	単	2014年度	上原記念生命科学財団	研究奨励金
9. 有機分子触媒による脱プロトン化を基盤とする新規分子修飾法の開発と不斉反応への展開	単	2014年度	有機合成化学協会	中外製薬研究企画賞
10. 遷移金属触媒による炭素-水素結合活性化を基盤とした革新的分子構築法の開発	単	2016年度	ひょうご科学技術協会	学術研究助成
11. 触媒的 C-H 官能基化を基盤とする高効率の複素環構築法の開発研究	単	2016年4月から2019年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
12. 遷移金属を用いた触媒的 C-H 官能基化による「新規複素環構築法創出研究」の新展開	単	2018年度	武田科学振興財団	2018年度薬学系研究助成
13. C-H 閉環プロセスによる複素環構築を基軸とした未踏分子変換プロセスへの挑戦	単	2019年4月から2022年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
14. 革新的複素環構築法創出を指向する触媒的 C-H 閉環反応の新展開	単	2022年4月から2025年3月まで	科研費	基盤研究 (C)

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2000年度から	日本薬学会 会員
2. 2007年10月	日本薬学会東北支部奨励賞 受賞
3. 2009年度から	有機合成化学協会 会員
4. 2009年7月	東北大学大学院薬学研究科研究科長賞 受賞
5. 2011年12月	有機合成化学協会アステラス製薬研究企画賞 受賞
6. 2013年度から	日本化学会 会員
7. 2013年3月	平成25年度日本薬学会奨励賞 受賞
8. 2013年5月	第12回インテリジェント・コスモス奨励賞 受賞
9. 2013年7月	東北大学大学院薬学研究科研究科長賞 受賞
10. 2013年12月	有機合成化学協会中外製薬研究企画賞 受賞
11. 2014年5月	第25回山下太郎学術研究奨励賞 受賞